

二〇一四年度 卒業論文

親鸞における還相の論理

コピー 一 厳禁

L108009

萩野 公章

目次

序論	1
本論	2
第一章 曇鸞教学とその背景	2
第一節 曇鸞の思想背景	2
第二節 曇鸞教学の特徴	4
第一項 浄土教観	4
第二項 救われる機とは	8
第三項 顕示他力	9
第二章 親鸞における還相回向論	0
第一節 親鸞の第二十二願観	0
第二節 親鸞独自の『論註』解釈における還相回向論	3
第一項 阿弥陀仏の本願力	3
第二項 浄土の本質	6
第三項 還相の菩薩の活動相	8

Copyright © 2017 禁廠

第三節	親鸞の還相回向論	2
結論	還相の現実的相状	3
註		
参考文献		

# コピ―廠禁

## 序論

読売新聞社が二〇〇五年に行った調査<sup>1</sup>で、幸せな生活を送る上で宗教は必要かと問うた所、回答者の六割が「そうは思わない」と回答している。現代日本は世界でも無宗教・無信心の国民として最右翼に位置するが、二〇〇八年の日本人の国民性調査において、「信仰がある」と答えた者は二十七%で一九七八年より七ポイント減少している。一方で現代社会は科学技術の目覚ましい発達により物質的には豊かな社会になったが、その分現代人はストレスに晒され、人々は救いや癒しを求めて彷徨っている。しかし、それが信仰（信心）という深い自己の内面に向かって行かないことは前述の調査でも明らかであり、それどころか信仰という「いろもなし、かたちもましまさず。しかればこころもおよばれ」<sup>2</sup>ないなにかを拒否していることさえ感じられる。一方で正月には国民の七割が初詣をし、どこそこの神社が恋愛のパワースポットだと聞けば若者が大挙して押しかけ、現世利益（親鸞の説く現世利益とは全く異なるところの）を説く新興宗教が乱立するのは、それだけ現代の日本人が憂慮すべき状態にあるとも言えるのだ。

仏教が大乗仏教と小乗仏教とに大別される所以は利他行の故であり、また浄土真宗こそがその大乗仏教の至極の法であると親鸞は言っている。前述したこの憂慮すべき日本人の精神的疲弊に対し、如何なる利他行を実践出来るのが、現代の浄土真宗の喫緊課題と言えるだろう。

本論では浄土真宗の教えの綱格をなす往相・還相の二回向のうち、衆生摂化の利他教化地の益である「還相」を取り上げる。まず親鸞教義に大きな影響を与えた曇鸞教学を概観し、独自の宗教体験を基底とする親鸞教義の

還相回向論を解釈した上で「還相」の相状そのものを親鸞はどう領解していたのか、並びに宗教体験が皆無ともいえる現代人、しかも実証主義の教育をうけてきた現代人にとって還相の論理は、如何なるものであるのかを、親鸞の『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』と略す）「証卷」還相回向釈を中心に窺いたい。

本論

## 第一章 曇鸞教学とその背景

### 第一節 曇鸞の思想背景

親鸞の主著『教行信証』六巻は、多くが引用文で述べられ、自釈といわれる親鸞自身の言葉は少ない。特に本論で取り上げる「証卷」還相回向釈は冒頭の親鸞自釈を除いて、ほとんどが曇鸞の『無量寿経優婆提舍願生偈註』（以下、『論註』と略す）の引用文で占められている。従ってこの引用文の原意を引き出し、親鸞の引用意図との相違を比較していくことが、親鸞教義を考察する上で非常に重要である。本章ではその親鸞教義に大きな影響を与えた曇鸞教学について『論註』を通して窺うこととする。

道宣の『続高僧伝』<sup>3</sup>によれば曇鸞は四論と仏性の学をおさめたとされている。四論とは鳩摩羅什によって翻

訳されたところの龍樹の著である『中論』『十二門論』『大智度論』及び龍樹の弟子提婆の著『百論』をいうが、曇鸞の著述には『大智度論』からの引用が多く、また羅什門下の僧肇の影響も受け、曇鸞が羅什門下に属する学者であったと言える。すなわち曇鸞は羅什、僧肇等を通じて龍樹の空観哲学を伝承したのである。また曇鸞の著した『論註』は周知のごとく瑜伽行唯識の世親の『無量寿経優婆塞願生偈』（以下、『浄土論』と略す）に註解を施したものである。すなわち曇鸞は、空観哲学思想と瑜伽行唯識思想とを『論註』において統合したと言っても過言ではない。

さてここで『論註』の本文において龍樹の空観思想に関する文を見てみると、『論註』上巻の作願門釈で二つの問答を出している。<sup>4</sup>この問答は阿弥陀仏の浄土への願生も往生も、大乘で説かれている空思想と矛盾するのではないかという問いである。空・無我・無生を説く大乘仏教で、浄土に往生する、またそれを願生する思想は確かに矛盾を抱えている。まず一の問いで大乘仏教の経論には、衆生は「畢竟じて無生である」といわれるのに対し、なぜ世親は願生するのかという問いである。曇鸞はこれに対し、二つの理由で答えている。まず一点は、「願生」の「生」は凡夫が考えているような実体としての生ではなく、因縁生のゆえに名づけられた生であり、実体や実の生死などは空であって、実体がなく虚空のようだと答えている。これは問いの説を認めたことになる。二点目は「生」は因縁生であり、因縁によって生じるのであるから「仮に生まれる」のであって凡夫が考えているような実体としての衆生がいて、実体として生まれたり死んだりすることではない無自性空であるとするのである。二の問いでは、因縁生の立場で往生を定義して、穢土の仮名人（仮名とは実体のないものに対して仮につけ

た名で、縁起によって仮に和合した人の意<sup>5</sup>が五念門を修すれば、浄土の仮名人である仏・菩薩になることを往生とするのである。仏・菩薩もまた仮名人である。しかし曇鸞は穢土の仮名人と浄土の仮名人が同一人であって同一人でない、すなわち「不一不異」の関係とみている。穢土において次第に修行を完成させていく先に、往生浄土という果がもたらされるから、両者の間には因果関係があると認められ、しかし往生によって迷いから悟りへと転換していくから両者は断絶していなければならない。この関係を不一不異と表現するのである。

こうして曇鸞はこの問答により、浄土への往生が大乗空思想と矛盾しないかという疑問に対し、諸法は無自性空であり、因縁生であることを示し、浄土往生を説く浄土教が「空」の思想である中観思想にのっとっていることを示したのである。

## 第二節 曇鸞教学の特徴

### 第一項 浄土教観

『論註』には「往生浄土法門」<sup>5</sup>と述べられており、「浄土教」という概念が初めて出たと考えられる。『論註』では浄土教を「信仏の因縁によって浄土への往生をめざす仏教」ととらえており、その教理を組織立てた書物とも言える。前述したように『論註』は『浄土論』を註解した書物であるが、そのまま註解したのではなく、曇鸞

独自の解釈が施されている。すなわち『浄土論』の註釈書にもかかわらず冒頭に龍樹の『十住毘婆沙論』を引用していることや、『浄土論』には記載されていない「八番問答」や「覈求其本釈」等々を述べていることでも明らかである。

龍樹は『十住毘婆沙論』『易行品』で、仏教を難行道と易行道の二つに分け、諸・久・墮の難をさけて速やかに阿唯越致にいたる方法として信方便易行を説いており、諸仏、諸菩薩を念じ、その名を称えることで、不退転に至ると述べるのであるが、これを受けて曇鸞は『論註』冒頭で易行道に対して

易行道者、謂但以信仏因縁願生浄土、乗仏願力、便得往生彼清浄土、仏力住持、即入大乘正定之聚。正定即是阿毘跋致。譬如水路乗船則樂。<sup>6</sup>

と示して、まさに易行道が「信仏の因縁によって浄土への往生をめざす」仏教であることを述べ、浄土教においては仏の力が関与していることを明らかにしたのである。

このように瑜伽行唯識の実践行として往生浄土の修行を説いた『浄土論』であるが、曇鸞は『論註』冒頭に『十住毘婆沙論』を引用することで、浄土教は易行道であると述べ、そしてこの視点から『浄土論』を理解、註解した。ところで、前述したように『論註』には『浄土論』の註釈外の部分が存在するが、その註釈外の部分から曇鸞独自の教学を窺うことも出来る。まず一点目は『論註』冒頭の『十住毘婆沙論』より

易行道者、謂但以信仏因縁願生浄土。<sup>7</sup>

を示し、二点目は上巻の終わりに八番問答を設けて、



信・仏・因・縁・皆得往生。<sup>8</sup>

と述べ、三-point目は下巻の最後で同様に

經始称如是、彰信為能入。<sup>9</sup>

と述べ、いずれも『浄土論』にはない曇鸞独自の解釈を施しているが、これら三点の共通点は「信」であり、曇鸞は「信心」を強調していたことが窺われる。世親が五念門の修行により往生を願じたのに対し、曇鸞は「信心による往生」を願じたことが窺われる。

ところで世親が『浄土論』で示した五念門について曇鸞はどのように解釈したのであるうか。五念門とは、世親が『浄土論』において瑜伽行唯識の実践の体系に沿って、浄土に往生するための行として示された五種の行である。すなわち礼拝門、讚嘆門、作願門、觀察門、回向門をいうが、『浄土論』における五念門の中心は作願門と觀察門である。作願門は「一心に浄土往生を目指し奢摩他（止）の行を修すること」であり、觀察門は「智慧をもって觀察し毘婆舍那（觀）を行すること」と説き、止・觀はともに瑜伽行唯識の中心的な行業である。

さて曇鸞は、『浄土論』を註解して阿弥陀仏の仏国土の清浄性を主張するのであるが、そうすれば当然往生するための行である五念門行は清浄でなければならぬ。しかし前述したように曇鸞は往生浄土では易行道を立てるのであるから、五念門は凡夫にも修することの出来る往生の行でなければならぬ。一方『浄土論』には五念門を易行道とする考え方はない。したがって五念門行が凡夫にも修することが可能で、なお且つ清浄な仏国土に往生する清浄なる修行であることが立証されねばならない。こうして曇鸞独自の五念門觀が成り立つのである。

禁教

讚嘆門の釈において『浄土論』では

いかんが讚嘆する。口業をもつて讚嘆したてまつる。かの如来の名を称するに、かの如来の光明智相のごとく、かの名義のごとく、如実に相応を修行せんと欲するがゆゑなり。<sup>10</sup>

とあり、如来の名を称して如来の光明智相を得て、菩薩行の成就を目指すのであるが、これに対し『論註』は

「かの如来の名を称す」とは、いはく、無碍光如来の名を称するなり。「かの如来の光明智相のごとく」とは、仏の光明はこれ智慧の相なり。(中略)「かの名義のごとく、如実に修行して相応せんと欲す」とは、かの無

碍光如来の名号は、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。<sup>11</sup>

と述べて、如来の名号には、衆生の煩惱を取り除き、志願を満たすはたらきがあるから、往生の因であると示したのである。点線部分の読み方を比較すれば『浄土論』では「相応」はサンスクリット語の *yoga*、つまり修行・瑜伽の意であり、相応というこの行を行じることによって仏智に近づいて行くと解釈でき、「称名」は「如実に相応を修行する」手段と捉えられる。それを『論註』では「如実に修行して相応せんと欲す」と解釈して如実に（讚嘆という行（＝称名）を）修行することによって、讚嘆される仏の名義（＝仏智）と相応（＝相適う、一致していく）したいと望むと解釈して称名の功德を強調したのである。<sup>12</sup>

このように曇鸞は五念門をそれぞれ解釈したが、讚嘆門に最も注力して、称名が往生の因となることを立証した。また曇鸞は作願門、観察門、回向門が完成するのは往生後であると解釈し、五念門行の清浄性と凡夫も修することの出来る易行性とを両立させたのである。清浄である五念門は此土及び浄土で成就するから、此土での行

は未完成であり、修し易い。しかし、如来の名号のはたらきによって清浄性を与えられているから、往生の因となるのである。また称名が往生の因であると主張するのも同様の意図がある。如来の名を称えるだけなら凡夫でも出来る。しかも如来の名号には衆生救済の功德が備わっているからである。

## 第二項 救われる機とは

曇鸞の發揮の一つは、救われていく人間とはどのような人間かを明確にした点である。『論註』上巻の末尾に設けられた八番問答は下下品人の往生について論じているが、第一問答では、いかなる衆生が往生するのかを問題として

問曰、天親菩薩回向章中言「普共諸衆生、往生安樂國」、此指共何等衆生耶。<sup>13</sup>

と問いを發し、それに答えて

答曰、案王舍城所說『無量壽經』（中略）一切外道凡夫人、皆得往生。又如『觀無量壽經』有九品往生。

（中略）以此經証、明知下品凡夫但令不誹謗正法、信仏因縁皆得往生。<sup>14</sup>

と示して、『無量壽經』の第十七・十八願成就文と『觀無量壽經』下品下生段の文により一切の外道・凡夫人も正法を誹謗しなければ「仏を信ずる因縁」によって往生できると述べる。謗法の罪人以外はすべてのものが救済対象になると理解するのである。しかしここで問題が出てくる。『無量壽經』には「ただ五逆と誹謗正法とをば除く」

とあり、『観無量寿經』には、五逆・十悪のものも往生できると説かれている。この矛盾を論ずるのが第二く第五問答である。こうして曇鸞は『論註』八番問答によって救われていく人間とはいかなる人間かということを問うて、阿弥陀仏の本願力によって救われるのは、謗法罪のものを除くすべての者であると明らかにしたのであるが、そうすると謗法罪の者は永久に救われないことになってしまいが、『論註』下巻、口業功德成就の註解において謗法の者も救われると説き、<sup>15</sup>こうして曇鸞は、本願力の救いの対象は五逆・謗法の者も含むすべての衆生であることを明らかにしたのである。

### 第三項 顕示他力

曇鸞の大きな発揮は「顕示他力」であると言える。そもそも『浄土論』には五念門の因によって順次に五功德門の果を得、ついに仏果を成就する（漸次成就）と説かれていながら、その後

菩薩如是修五門行自利他。速得成就阿耨多羅三藐三菩提故。<sup>16</sup>  
と説かれている（速得成就）。この矛盾を解明したのが『論註』に収められたいわゆる「覈求其本釈」と呼ばれる解釈である。

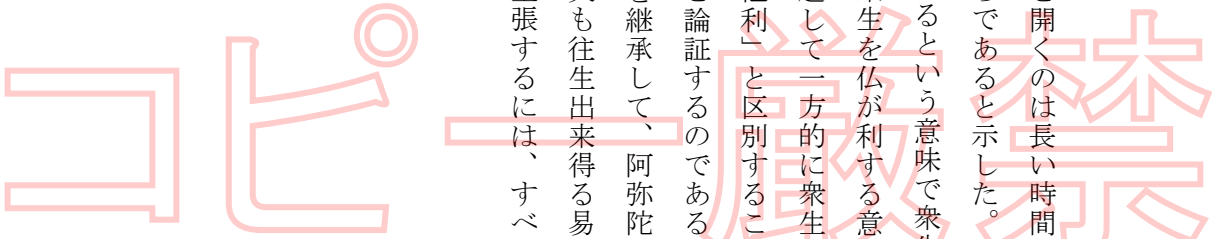
然覈求其本、阿弥陀如来為増上縁。（中略）凡是生彼浄土、及彼菩薩人天所起諸行、皆縁阿弥陀如来本願力故。

と述べて、五念門の行によって仏のさとりを開くのは長い時間を要するはずであるが、速得成就と説かれたのは阿弥陀如来の本願力すなわち他力によるからであると示した。またここでは他利利他を説くことによって他力を述べている。「他利」とは衆生が仏に利せられるという意味で衆生からいうところの従生向仏の見方であるが、「利他」というのは仏の立場に立った言葉で、衆生を仏が利する意味で仏力をあらわす従仏向衆の見方であり、阿弥陀仏が本願力によって衆生のはからいを超越して一方的に衆生を救済する他力、すなわち仏の絶対性を強調しているのである。よって衆生の側に立った「他利」と区別することに言及するのである。こうして衆生の往生も往生後の諸行も阿弥陀仏の本願力によることを論証するのである。

このように『論註』は『浄土論』の立場を継承して、阿弥陀仏と浄土の清浄性、および往生行としての五念門の清浄性を主張するとともに、あらゆる凡夫も往生出来得る易行道としての浄土教を目指した。凡夫の往生を可能にしながら、尚且つその因果の清浄性を主張するには、すべてにおいて他力すなわち阿弥陀仏の本願力によることを明らかにする必要があったのである。

## 第二章 親鸞における還相回向論

### 第一節 親鸞の第二十二願観



親鸞は還相廻向釈の冒頭自釈で

二言還相回向者、則是利他教化地益也。則是出於必至補処之願。亦名一生補処之願。亦可名還相回向之願也。

願『註論』。故不出願文。可披『論註』。<sup>18</sup>

と述べ、還相回向は利他教化地の益であると説き、この還相回向の成立する根拠は第二十二願であることを明らかにし、「必至補処の願」「一生補処の願」である願名に「還相回向の願」と第三の願名を付して自身の第二十二願觀を的確に表した。それは『浄土三経往生文類』においても、この願を

この悲願は、如来の還相回向の御ちかひなり<sup>19</sup>。

と言われていることから頷ける。第二十二願は次のように説かれている。

説我得仏、他方仏土諸菩薩衆、來生我國、究竟必至一生補処。除其本願、自在所化、為衆生故、被弘誓鎧、積累徳本、度脱一切、遊諸仏国、修菩薩行、供養十方諸仏如来、開化恒沙無量衆生使立無上正真之道、超出常倫諸地之行、現前修習普賢之徳。若不爾者、不取正覚。<sup>20</sup>

この第二十二願を原文の読み方で内容を窺うと、往生後の菩薩が「必ず一生補処に至る」ことであり、それに付随することとして、その菩薩の願によってはその限りでなく、諸仏の国におもむいて自在に衆生救済の活動を行えるとも誓われている。この第二十二願を『論註』で曇鸞は

たとひわれ仏を得んに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生せば、究竟してかならず一生補処に至らん。(中略)無上正真の道を立せしめんをば除く。常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん。も

ししからずは、正覚を取らじ。<sup>21</sup>

と読んでおり、浄土に往生して仏を見たてまつた未証浄心の菩薩は十地の階位を順に追うて進んで行くのではなくて、初地からいきなり八地、九地、十地と階位を超越して上地の菩薩と同等の平等法身を得ることを証する根拠として第二十二願を引いて、この願を「超出常倫の願」と見ていたのである。

ところが親鸞は『論註』の「常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん」を「常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん」と読んで<sup>22</sup>独特な第二十二願觀を成り立たせた。親鸞独自の解釈では、往生後の菩薩は「常倫」に超えすぐれた、つまり通常の菩薩を超越した存在となり、各段階の修行相をとりながら、自在な利他活動を修することが出来ると誓われていることになる。すなわち「諸地の行現前し」とは還相示現の徳を示すことであり、浄土の還相の菩薩は從因向果の五十二位と異なり、從果還因の菩薩の還相摂化の徳を示すものである。一地一地の位が融通無礙であり、自在の還相摂化の相の展開が可能であるのは第二十二願成就の本願力によるのであり、往生後の菩薩は從果還因の菩薩となり、あらゆる修行相を示して自在な衆生救済の活動におもむくことが出来ることを明らかにするのである。

また親鸞は「行巻」他力釈においても『論註』を引いて第二十二願を解釈しているが、当面では  
以超出常倫諸地行故、所以得速三証也。<sup>23</sup>  
とある箇所を次の如く

以超出常倫、諸地之行現前故、所以得速三証也。<sup>24</sup>

と読んで当面にはない「現前」を挿入し、ここにおいても阿弥陀仏の本願力すなわち還相の徳を明らかにしようとした。

こうして親鸞の第二十二願引用の意図は従果還因の還相の菩薩の摂化活動の根拠としての引用であると窺える。この第二十二願成就の阿弥陀仏のはたらきこそが、往生人に還相の利他活動をなさしめる、還相回向そのものであると言える。

## 第二節 親鸞独自の『論註』解釈における還相回向論

### 第一項 阿弥陀仏の本願力

この節より親鸞が『論註』から引用した文を中心に曇鸞解釈と親鸞独自の解釈を比較しつつ還相回向を窺うこととする。本項では『浄土論』観察体相章の「莊嚴不虛作住持功德成就」の文から

何者莊嚴不虛作住持功德成就、偈言「觀仏本願力 遇無空過者 能令速滿足 功德大宝海」故。即見彼仏、未証淨心菩薩畢竟得証平等法身、與淨心菩薩與上地諸菩薩畢竟同得寂滅平等故。<sup>25</sup>

を受け阿弥陀仏の本願力について窺う。不虛作住持功德成就とは、すべてのものを仏道から退転させることのない阿弥陀仏の真実なるはたらきと解釈できるが、曇鸞は『論註』において



「不虛作住持功德成就」者、蓋是阿彌陀如来本願力也。<sup>26</sup>

と述べている。七地以前の菩薩である未証淨心の菩薩も浄土に往生して阿彌陀仏を見たてまつらば、阿彌陀仏の不虛作の本願力により平等法身のさとりをひらき、報生三昧を得るのである。しかし、『論註』当面では、平等法身のさとりを得てはいるが、どこまでも仏果に向かう途上の菩薩として説かれているが、往生即成仏を説く親鸞にとつては、浄土にある菩薩はすでに仏のさとりを開いた上に果後の方便相として示現されている、還相の菩薩なのである。

ところで、ここでいうところの未証淨心の菩薩とは初地より七地までの菩薩であるが、道綽はこの未証淨心の菩薩に凡夫も含むと考えている。『安樂集』に

『浄土論』云、「十方人天生彼国者、即與淨心菩薩無二。淨心菩薩即與上地菩薩畢竟同得寂滅忍。」<sup>27</sup>

とあり、凡夫も浄土に往生せば、報生三昧の利益を得、還相摂化の悲用の徳が不虛作住持の阿彌陀仏の本願力により恵まれるとあり、親鸞も同様に領解していたのではないかと推測される。

この菩薩の自在の還相摂化の展開相が、報生三昧の四種功德の悲用であり、「証卷」引用の菩薩の四種正修行功徳成就の文にあらわされているが、正修行功徳とは不動而至の徳、一念遍至の徳、無相供養の徳、示法如仏の徳であり、まず「不動而至の徳」とは

以三昧力身不動本処而能徧至十方、供養諸仏、教化衆生。<sup>28</sup>

と示され、身は浄土に置きながら十方世界に趣き仏を供養し、衆生を教化するはたらきであり、そのはたらきは

応化身光徧諸世界也<sup>29</sup>。

と説かれて、光が行き渡ると示されているが、光とは智慧であり智慧が行き渡るとは、法が行き渡り衆生を教化することである。また次に「一念徧至の徳」とは、

彼応化身、一切時不前不後、一心一念放大光明、悉能徧至十方世界、教化衆生。<sup>30</sup>

と説かれて、一念同時に十方世界に至り利他活動をすることができると示すが、ここでも大光明といい、すなわち智慧である法が一心一念に菩薩から衆生に至ると示されている。次に「無相供養の徳」では

彼於一切世界、無余照諸仏会。大衆無余广大無量供養恭敬讚嘆諸仏如来功德。<sup>31</sup>

とあって、菩薩は一切の仏会、大衆を供養、恭敬し讚嘆するが、ここでも照らすとの表現で法が行き渡ると明かされている。また「示法如仏の徳」では

彼於十方一切世界無三宝処、住持莊嚴仏法僧宝功德大海、徧示令解如実修行。<sup>32</sup>

と示し、無仏の世界に出現して仏法僧の三宝を称賛し住持する徳が示されている。菩薩のはたらきは有仏の時・場所はもちろん無仏の時・場所にも届くことを示しており、だからこそ今の娑婆世界に仏菩薩の教えが届いているのである。

この菩薩の四種の正修行功德はすべて無作の衆生済度のはたらきが出来ることを示しており、本願力による還相のはたらきである。阿弥陀仏の住持力に支えられた還相は

或現神通而説法、或現相好入無余。<sup>33</sup>

のであるが、まさに「法を説く」ことは、衆生側からいえば、「法」を受けること、教えを頂くことそのものであると言える。すなわち親鸞の引意から言えば、すべて従果還因の菩薩による利他教化地の益であり、衆生を済度する法であり、普賢の徳なのである。

## 第二項 浄土の本質

報生三昧の還相摂化の悲用が成立する浄土の本質を明らかにするのが、「浄入願心章」である。冒頭で

浄入願心者、又向説觀察莊嚴仏土功德成就・莊嚴仏功德成就・莊嚴菩薩功德成就。此三種成就願心莊嚴、応知。応知者、応知此三種莊嚴成就、由本四十八願等清淨願心之所莊嚴、因淨故果淨、非無因他因有也。<sup>3 4</sup>

と示しており、「浄入願心」については、「浄」は三種莊嚴でその本質は無漏であり、「入」は法蔵菩薩の因位の願心に報いて成り立った意味をあらわし、「願心」は法蔵菩薩の四十八願である。よって四十八願が清淨であるから三種莊嚴も清淨であると説明する。「因淨なるが故に果淨なり」である。ところで何故阿弥陀仏は、浄土を有相の三蔵二十九種の莊嚴でもって我々に示されたのか。それは無相の真如法性界が自らを現わして、我々をして体得させんが為である。親鸞はこの引用において、還相の悲用もまた願心の成就であり、浄土は還相摂化の成立する一つの根拠であると考えるのである。そしてこの浄土の本質を説明するに広略相入・二種法身・一法句の義が説かれている。まず広略相入を明かす一段を見ると、三蔵二十九種を広とし、一法句を略として、

何故示現広略相入、諸仏・菩薩有二種法身。一者法性法身、二者方便法身。由法性法身生方便法身。由方便法身出法性法身。此二法身、異而不可分、一而不可同。是故広略相入、統以法名。<sup>35</sup>

と述べている。前述したように、浄土は法蔵菩薩の清浄なる願心によって成立したものであるから、浄土は真如の展開したものであり真如を本質とするのであるから、三種莊嚴は一法句の真如を基に成り立つものと言えよう。この浄土の三種莊嚴と一法句の真如との関係を明らかにするのが「広略相入」である。広略相入とはいずれもが広の差別相のまま、略の無相平等であり、略の平等相のまま、広の差別相である。この広略相入を具体的に示したのがこの引文によって説かれた二種法身である。この文は広である浄土の三種莊嚴全てを「方便法身」、その本質にあたる略である一法句を「法性法身」の語でそれぞれ示し、その両者が由生由出・不一不異であることをいうものである。曇鸞はこの二種法身の関係により広略相入の意味を説明しているのである。また

菩薩若不知広略相入、則不能自利利他。<sup>36</sup>

と述べるように、菩薩は略である真如に達して自利を満足し、広である三種莊嚴を知ることによって衆生摂化の利他を満足するのである。もし広を知らざれば俗諦の差別を了知しないから利他することが出来ず、略を知らねば真諦の平等を了知しないから自利することは出来ない。すなわち広略相入の涅槃界とは自利利他円満の妙境界であることを示したものである。ここから親鸞の引用意図は、広略相入の浄土には、衆生済度のはたらきを具体化する性格があると領解していたものと思われる。浄土の往生人は当然に弥陀同体の二種法身、広略相入の果徳を証するのであり、浄土より穢土へという還相摂化の悲用が、涅槃界の土徳として顕現するといわねばならない。

ところで、ここで法性法身・方便法身の両者とも「法身」と示されているのであり、『論註』当面では両者が真実の存在として対等の関係にあると示しているが、親鸞は独自の解釈を施す。すなわち

然諸法心成無余境界。衆生及器、復不得異不一。則義分不異、同清淨。<sup>37</sup>

とあるように、『論註』当面ではただ不一不異の関係をいう文であるが、親鸞はこれを読み替えて、衆生が往生していく浄土はどこまでも一なる清浄世界であり真如の涅槃界としており、その涅槃界の中に還相のはたらきが示されていると領解していくのである。

### 第三項 還相の菩薩の活動相

本項では還相の菩薩の活動相について明らかにする。まず善巧摂化章では回向門の利他行成就を示しているが、冒頭に

善巧摂化者、如是菩薩、奢摩他・毘婆舍那、広略修行成就柔軟心。柔軟心者、謂広略止観、相順修行、成不二心也。<sup>38</sup>

とあり、すなわち広と略の止観が成就して、柔軟心を成就するところに還相の菩薩が行う巧方便回向が成立することを明かしているのである。この文は『論註』当面では、菩薩が柔軟心を成就していき、巧方便回向を成就していく過程を示しているが、親鸞の引用では、すでに修行成就して柔軟心を得た後の菩薩のありようを示す文と

なっている。ここでいう「善」巧方便」とは、仏・菩薩が衆生をさとりに導くために、衆生の素質や能力に応じて巧みに教化する手段、方法と理解できるが、具体的な活動相をあらわす文として

菩薩巧方便回向者、謂説礼拝等五種修行、所集一切功德善根、不求自身住持之樂、欲拔一切衆生苦故、作願撰取一切衆生、共同生彼安樂仏国。<sup>39</sup>

とあり、自身の積んだ功德を以て一切衆生を往生させようとする菩薩の活動相を示しているが、『論註』当面では往生前の願生者のこととしているのに対し、親鸞は浄土における菩薩の還相活動の相として見ているのである。すなわち「巧方便回向」とは還相の菩薩の利他活動そのものを示す言葉としている。このようにして善巧摂化章では、広略止観修行成就（自利）と巧方便回向成就（利他）は阿弥陀仏の本願力回向による還相の菩薩の活動相としてあらわされているのである。

還相の菩薩の利他行である善巧摂化の菩提心を遠離と随順の二面から観ていくのが、障菩提門と順菩提門とであり表裏の関係にある。まず障菩提門とは、智慧・慈悲・方便の三門により菩提心を妨げる貪着自身心、無安衆生心、供養恭敬自身心の障りを遠離することであり、順菩提門とは智慧・慈悲・方便の三門によって得るところの三種の清浄心すなわち無染清浄心、安清浄心、樂清浄心を示している。この二門は還相の菩薩の内面をあらわしており、智慧門により自樂を求めず、貪着自身心を離れば、無染清浄心を得るのであり（自利）、慈悲門により一切衆生の苦を抜き、無安衆生心を遠離すれば安清浄心を得、方便門により一切衆生を憐愍して、供養恭敬自身心の障りを離れば、一切衆生を浄土に往生せしめ、樂清浄心の満足がある（利他）と説いているのである。

三種の遠離の心と清浄心により、還相の菩薩の衆生摂化の具体的な相が示されている。

続いて名義撰対章では衆生摂化の利他の方便は般若の智慧と不離一体であることを説示している。障菩提門で述べた智慧・慈悲・方便による遠離の三心と順菩提門で述べた清浄心の三心とが智慧心・方便心・無障心・妙楽勝真心の四心に摂まることを明らかにし、この四心は還相の菩薩の利他の巧方便回向の基盤的な心であることを明らかにしているのである。般若とは一如をさとする無分別智であり実智である。方便とは差別相を知る権智である。還相の菩薩の体得する自利利他円満の妙位は換言すれば智慧と慈悲と方便が満足する妙位であり、般若の実智と方便の権智とはまさに不離一体であるといえる。般若の実智により一如に達すれば心行寂滅である。また方便の権智により衆生の差別相をつぶさに知ることができる。衆機を知り尽くす権智は、すべての機類に応じていながら分別する所がなく無知に帰す。一方心行寂滅の般若の実智は無知でありつつ、衆機を方便して迷いの世界で利他するとしても心行寂滅を失わない。心行寂滅すといえども、衆機の相をつまびらかに知り、利他摂化の活動に出るのである。般若と方便が共にはたらくところに、還相の菩薩の衆生摂化の成就があるといえる。

以上述べたように、名義撰対章においては、還相の菩薩の悲用は般若・方便両者があいまって展開するものであり、衆生摂化の根底に位置するものである。また般若（智慧心）・方便心・無障心・妙楽勝真心の四心は還相の菩薩の悲用、巧方便回向の心的内容であるとも親鸞は受け止めていたのであろう。

続いて願事成就章では還相の菩薩の願事成就、自在の業が成就していることを明かす一段である。願とは前述した智慧心・方便心・無障心・妙楽勝真心の四心であり、事とは五念門の行を指す。まず冒頭に

願事成就者、如是菩薩智慧心・方便心・無障心・勝真心、能生清淨仏国土、応知。応知者、謂応知此四種清淨功德、能得生彼清淨仏国土、非是他縁而生也。<sup>40</sup>

とあり、点線部分を当面では「清淨の仏国土に生ず」となり、願生行者が四心を成就して浄土に生ずることを明かすのであるが、親鸞引用の意では「清淨仏国土に生ぜしめたまへり」と読んで、還相の菩薩が四心を具して衆生を浄土に往生させると示して、衆生済度の願事の成就を明かすものとして引用される。『入出一門偈頌』に

無碍光仏因地時 発斯弘誓建此願 菩薩已成智慧心 成方便心・無障心 成就妙楽勝真心 速得成就無上道

<sup>41</sup>

とあって明らかである。法蔵所修の四心は成就され回向されて還相の菩薩の四心となって展開しているのである。

また次の一段では

是名菩薩摩訶薩、随順五種法門、所作随意自在成就。<sup>42</sup>

とあり、『論註』当面では「意に随ひて自在に成就すと名づく」と読んで、從因至果の願生行者の菩薩が五念門に随順し、五功德門の功德により、浄土に往生して出沒自在の業が成就したとなるが、親鸞引用の意では從果還因の菩薩が四心を具足し五念門にしたがって、心のままに（随意自在）摂化活動を満足していると読んでいる。從果還因の菩薩が満足している五念門の功德は衆生を浄土に往生せしむるのであり、その還相のはたらきは心のままに自由自在であるという意である。よって願事成就章は、還相の菩薩の願事成就、還相摂化の自在の業が成就しているものとしての引用である。



最後の利行満足章は、自利利他の行が満足して仏果を証することを明かす一段である。冒頭に

利行満足者、復有五種門、漸次成就五種功德、応知。何者五門。一者近門、二者大会衆門、三者宅門、四者

屋門、五者園林遊戯地門。此五種、示現入出次第相。<sup>43</sup>

とある。『論註』当面では浄土を願生する行者が此土において実践した、礼拝・讚嘆・作願・觀察・回向という因の五念門行に応じて、浄土において近門・大会衆門・宅門・屋門・園林遊戯地門という五種の功德が成就し阿耨多羅三藐三菩提に至ると明かされたのである。五念門も五功德門も順次智慧と慈悲、自利と利他を完成して仏果を得る従因至果の順序で明かされている。

一方、親鸞は還相回向釈にこの「五功德門」を引用したのは、そのすべてを往生人の還相摂化の相としてとらえているということである。往生して得る果とは五功德門であり、換言すれば、阿弥陀仏回向の自利利他円満の菩提心は、浄土において五功德門のはたらきとなって展開するのである。「漸次に」とあるが、『六要鈔』によれば、<sup>44</sup> 豎の義に約せば五念の因をもって、浄土の五功德門を順次成就していくのであるが、横の義に約せば、五念門の修行満足して、浄土の五功德門を同時に具足するといっている。すなわち親鸞にとつては、自利利他円満の横超の本願力により浄土に往生して同時に五功德門の果を証し、自利利他のはたらきをするのである。五功德門の自利利他満足の菩薩の行相は還相の活動相といえるのである。先述したように、親鸞による還相の内容は第五の園林遊戯地門だけでなく、近門から屋門に至る前四門までも還相とみなしており、単に穢土に還来して利他の活動を行うというだけでなく、浄土、穢土に関わらず、仏果を極めた者が菩薩の相をあらわして、自利利他の

徳を示す従果還因の活動のすべてを還相と呼んでいたといわねばならない。

直接的に還相の悲用を示す園林遊戲地門について

出第五門者、以大慈悲觀察一切苦惱衆生、示応化身、回入生死園、煩惱林中、遊戲神通、至教化地。以本願力回向故。<sup>45</sup>

と示されているが、文中の「本願力」について『論註』当面では、従因至果の願生行者の菩薩の本願力であるとしているが、親鸞は阿弥陀仏の本願力と解している。還相の菩薩が平等法身を体得して、報生三昧に入り、種々の身、種々の神通、説法を現じて、すなわち法をもって衆生を済度するのであるが、このような還相のはたらきはすべて阿弥陀仏の本願力によるものであることを親鸞は示そうとしたのである。

### 第三節 親鸞の還相回向論

以上見てきたように、親鸞は「証卷」における還相回向釈のほとんどを『論註』からの引用で説明しており、曇鸞の影響を大きく受けながら、親鸞独自の訓点による読み方・理解の仕方を行って還相回向論を明らかにした。親鸞は、阿弥陀仏によって浄土において仏果を得た往生人が菩薩として還相し、衆生摂化することを明かすものとして理解して引用したのである。『浄土三経往生文類』では

いかんが回向したまへる。一切苦惱の衆生を捨てずして、心につねに作願すらく、回向を首として大悲心を

成就することを得たまへるがゆゑに<sup>46</sup>

と点線部分を読み替えて、回向の主体は阿弥陀仏であることを明らかにした。すなわち、『論註』当面においては回向の主体はあくまで浄土を願生する行者であるが、親鸞によれば、往還するのは衆生であるが、往還せしめるのは阿弥陀仏の本願力のはたらきであることを本願力回向と示し、回向の主体は阿弥陀仏であると領解した。

還相回向といふは、『浄土論』曰、「以本願力回向故、是名出第五門。」これは還相の回向なり。<sup>47</sup>と示して、当面では願生行者の本願力を、親鸞は阿弥陀仏の本願力と解釈したのである。曇鸞にとって、還相とは単に「還来穢国の相状」という意味であったが、親鸞にとつての還相は穢土に還来して利他の活動を行うだけでなく、仏果を極めた者が菩薩の相を現して、自利利他の徳を示現する従果還因の活動のすべてを還相と領解していたのである。

結論 還相の現実的相状

「証卷」冒頭に

謹顕眞実証者、則是利他円満之妙位、無上涅槃之極果也。<sup>48</sup>

と説示があり、二利円満の弥陀同体の果である旨が示され、この証果である滅度が転積され、正定聚の信心の行者の往生即成仏の仏果の内容を明らかにしている。すなわち往生人には弥陀同体のさとりがめぐまれることを説

示し、滅度の証果には還相撰化の悲用が含まれており、往生人も弥陀と同じく、広門示現の種々相をとり衆生を濟度する徳に恵まれるのである。弥陀同体のさとりを得た還相の菩薩とは、衆生からみれば浄土の仮名人であるが、すなわちさとりのものなのである。

諸仏・菩薩有二種法身。一者法性法身、二者方便法身。<sup>49</sup>

である還相の菩薩が娑婆世界の衆生を濟度するはたらきとは、すなわち還相とは、さとりを衆生に伝えるための方便である「法」であり「教え」なのである。様々な迷える衆生を濟度するために

以大慈悲觀察一切苦惱衆生、示応化身、<sup>50</sup>

とあり、「夫顕真実教者、則『大無量寿経』是也。」<sup>51</sup>であるが、応化身を示して、『観経』『小経』始め八万四千の経が説かれているのである。

さとりであり、真如である還相の菩薩が法となり、教えとなって衆生を濟度するとは

言本願力者、示大菩薩於法身中、常在三昧而現種種身、種種神通、種種說法、皆以本願力起。<sup>52</sup>  
であると示された。また『歎異抄』第二条において

弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、

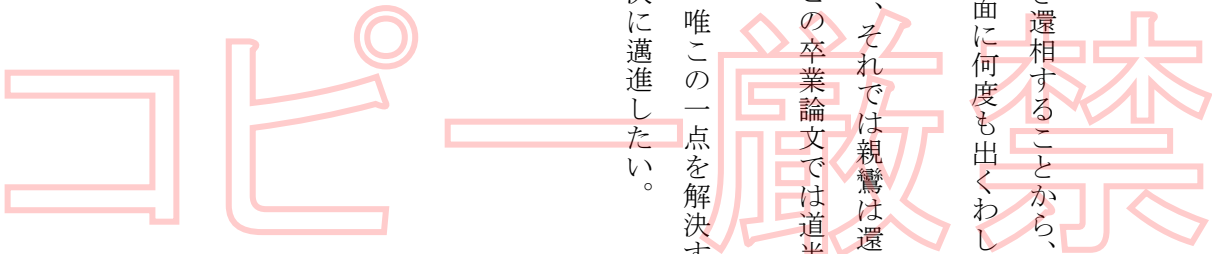
親鸞が申すむね、またもつてむなしべからず候ふか。<sup>53</sup>

との親鸞の思いは、まさに還相のありようを述べたものであったと思われる。

筆者は当初、衆生が往生しさとりをひらき還相することから、無意識に還相の菩薩を擬人化していたが、これでは、現代人に還相の有様を説明出来ない場面に何度も出くわした。また還相の菩薩とは？ 還相そのものとは？ を説明出来ずにいた。

「還相とは阿弥陀仏よりの回向である」が、それでは親鸞は還相そのものを如何に領解していたのであろうか。序論の問題提起を解決するには、まだまだこの卒業論文では道半ばであり、現在の私の能力ではこれが精一杯である。

還暦を過ぎて龍谷大学に学びに来たのは、唯この一点を解決するためであるが、この未熟な卒論を土台として大学院進学後に更なる努力をもって課題解決に邁進したい。



1 二〇一四年一月二十四日付 読売新聞朝刊「伏流…宗教と世界」(15) 宗教の重要性

2 『註釈版』七〇九頁

3 『大正蔵』第五十卷 四七〇上〜下

4 『新国訳大蔵経』「続高僧伝」一 卷第六 一七二頁

『聖典全書』一 四五四頁

問曰、大乘経論中、処処説衆生畢竟無生如虚空。云何天親菩薩言願生耶。答曰、説衆生無生如虚空有二種。一者如凡夫所謂実衆生、如凡夫所見実生死、此所見事畢竟無所有如龜毛如虚空。二者謂諸法因縁生故即是不生。無所有如虚空。天親菩薩所願生者、是因縁義。因縁義故仮名生。非如凡夫謂有実衆生実生死也。問曰、依何義説往生。答曰、於此間仮名人中修五念門、前念為後念作因。穢土化名人浄土化名人、不得決定一。不得決定異。前心後心亦如是。何以故。若一則無因果、若異則非相続。是義觀一異門論中委曲。

5 『聖典全書』一 五二四頁

6 『聖典全書』一 四四九頁

7 『聖典全書』一 四四九頁

8 『聖典全書』一 四八二頁

9 『聖典全書』一 五二九頁

『大正蔵』第二十五卷 六二下〜六三上

「仏法大海信為能入」とある

10 『註釈版七祖篇』三三三頁

11 『註釈版七祖篇』一〇三頁

12 五念門について『浄土論』の説示を確認すると

なんらか五念門。一には礼拝門、二には讚嘆門、三には作願門、四には觀察門、五には回向門なり。い  
 かんが礼拝する。身業をもつて阿弥陀如来・応・正遍知を礼拝したてまつる。かの国に生ずる意をなす

がゆゑなり。いかんが讚嘆する。口業をもつて讚嘆したてまつる。かの如来の名を称するに、かの如来の光明智相のごとく、かの名義のごとく、①如実に修行して相応せんと欲するがゆゑなり。いかんが作願する。心につねに願を作し、一心にもつばら畢竟じて安樂国土に往生せんと念ず。②如実に奢摩他を修行せんと欲するがゆゑなり。いかんが觀察する。智慧をもつて觀察し、正念にかしこを觀ず。③如実に毘婆舍那を修行せんと欲するがゆゑなり。かの觀察に三種あり。なんらか三種。一にはかの仏国土の莊嚴功德を觀察す。二には阿弥陀仏の莊嚴功德を觀察す。三にはかの諸菩薩の功德莊嚴を觀察す。いかんが回向する。一切苦悩の衆生を捨てずして、心につねに願を作し、回向を首となす。大悲心を成就することを得んとするがゆゑなり。〔註釈版七祖篇〕三二頁）とあるが、点線を引いた①②③を白文で確認すると、相応・奢摩他・毘婆舍那の語が異なるだけで、構造は同じである。

① 欲如実修行相応故

② 欲如実修行奢摩他故

③ 欲如実修行毘婆舍那故 〔聖典全書〕一 四三五頁

よって『浄土論』の理解としては、「如実に相応を修行せんと欲するがゆゑなり」と読むが妥当であると考えられる。曇鸞はこれを「如実に修行して相応せんと欲するがゆゑなり」と読んでいる。

1 3 『聖典全書』一 四八一頁

1 4 『聖典全書』一 四八二頁

1 5 『聖典全書』一 五〇八頁

衆生以驕慢故、誹謗正法、毀訾賢聖、捐庫尊長 尊者君父師也長者有德之人及兄党也。如是之人、応受拔舌苦・瘡痍苦・言教不行苦・無名聞苦。如是等種種諸苦衆生、聞阿弥陀如来至徳名号説法音声、如上種種口業繫縛、皆得解脱、入如来家畢竟得平等口業。

1 6 『聖典全書』一 四四三頁

1 7 『聖典全書』一 五二八頁

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	
『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』二	『聖典全書』一	『聖典全書』一	『聖典全書』一	『聖典全書』二	『聖典全書』一	『註釈版』三一六頁	『註釈版七祖篇』一三三頁	『聖典全書』一 二六頁	『註釈版』六三〇頁	『聖典全書』二 一三七頁	
一四九頁	一四五頁	一四五頁	一四四頁	一四三頁	一四三頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁	一四二頁

# コピー 一 廠禁



4 1	『聖典全書』二 三一八頁
4 2	『聖典全書』二 一四九頁
4 3	『聖典全書』二 一四九頁
4 4	『真聖全』二 三四四頁
4 5	「又約堅義如其次第、若約横義此五門益同時獲得一念具足、自然證悟惟而可知」と示されている。
4 6	『聖典全書』二 一五一頁
4 7	『註釈版』六二〇頁
4 8	曇鸞は、この箇所を次のように読んでいる。
4 9	いかんが回向する。一切苦悩の衆生を捨てずして、心につねに願を作し、回向を首となす。大悲心を成就することを得んとするがゆゑなり。(『註釈版七祖篇』一〇七頁)
5 0	『註釈版』六一九頁
5 1	『聖典全書』二 一三三頁
5 2	『聖典全書』二 一四三頁
5 3	『聖典全書』二 一五一頁
5 4	『聖典全書』二 九頁
5 5	『聖典全書』二 一五一頁
5 6	『註釈版』八三三頁

コピ― 禁 識

参考文献

書籍

- 梯 實圓 『教行信証の宗教構造』法蔵館 二〇〇一
- 村上速水 『教行信証を学ぶ』永田文昌堂 一九九六
- 村上速水 『親鸞教義とその背景』永田文昌堂 一九八七
- 石川琢道 『曇鸞浄土教形成論』法蔵館 二〇〇九
- 早島鏡正・大谷光真 『浄土論註』大蔵出版 一九八七
- 浄土真宗教学研究所 『顕浄土真実教行証文類―現代語版―』本願寺出版社 二〇〇〇
- 勸学寮 『今、浄土を考える』本願寺出版社 二〇一〇

論文

- 殿内 恒 「証文類」所説の還相回向義について」真宗研究四二 一九九八
- 殿内 恒 「親鸞聖人の証果論についての一考察―「証文類」の転訓箇所を中心に―」  
行信学報九 一九九六
- 殿内 恒 『往生論註』所説の他力思想」龍谷大学大学院研究紀要人文科学一六 一九九五

普賢晃壽 「還相回向論」真宗学九三 一九九六

梯 信暁 「曇鸞の浄土教思想」大谷女子大学紀要三二(一) 一九九七

井上善幸 「親鸞の証果論の解釈をめぐって」仏教文化研究所紀要五〇 二〇一一

井上善幸 「親鸞における還相の思想―死者との共生という視点から―」

東アジア思想における死生観と超越 方丈堂出版 二〇一三

林 智康 『教行信証』における『論註』の引用について 宗学院論集四五 一九七六

溪 英俊 「曇鸞浄土教の研究―『往生論註』における『大智度論』の思想的受容―」

龍谷大学大学院文学研究科紀要三〇 二〇〇八

